

13. 口腔発癌過程におけるケラチンの局在について

館山美樹, 賀来 亨, 奥山富三,
鏑原 茂*, 有坂一男*, 新保亮一*
(口腔病理, *岩手医大・歯・口腔病理)

多くの動物細胞は細胞の形態の保持に役割を演じ、細胞の収縮や運動に関係している細胞骨格と呼ばれている構造と関係する線維性蛋白を含んでいる。その1つであるケラチンは重層扁平上皮の細胞成分と考えられていたが、最近、非常に広い生物学的分布をしていることが認められている。ケラチンの研究はヒトの種々の癌組織においておこなわれているが、動物の口腔発癌過程における報告は少ない。

今回、われわれはハムスター口腔発癌過程における前癌病変、癌病変について、ハムスター正常頬嚢粘膜上皮よりケラチンを抽出し、その生化学的検索と、それを抗

原として、ケラチン抗体を作製し、その抗体を用い、ケラチンの局在を酵素抗体法により検索した。

質 問 金澤正昭(口腔外科Ⅰ)
癌組織中のケラチン量と悪性度の間に相関関係が認められるか。

回 答 館山美樹(口腔病理)
正常重層扁平上皮より抽出したケラチンに対する抗体および扁平上皮癌組織より抽出したケラチンに対する抗体を用いることにより、癌組織の分化度を評価することができると思われ、悪性度と相関を検索することができると思われます。

14. 口腔前癌病変における血液型物質 (A, B, H) の局在

賀来 亨, 館山美樹, 奥山富三,
北村完二*, 斎藤基明*, 岩井正行**
(口腔病理, *口腔外科, **札幌医大・口腔外科)

血液型A, B, H物質は赤血球膜のみならず、血管内皮細胞、種々の上皮細胞膜に存在することが知られている。血液型物質の消失が悪性変化の早期診断に役立ち、また血液型物質の存在の有無が膀胱癌などの悪性腫瘍の予後因子となることが知られている。血液型物質は口腔粘膜にも存在し、口腔前癌病変、癌病変において完全あるいは部分的に消失することが知られている。

今回、われわれは、血液型A, B, H物質のモノクローナル抗体を用いて、口腔前癌病変の血液型物質の局在を検索し、血液型に一致するA, B抗原の局在と血液型A, B物質の前駆物質であるH抗原の局在の有無を比較検討した。

質 問 磯貝恵美子(口腔衛生)

1. 用いた単クローン性抗体の認識siteは具体的に糖鎖のどのようなsiteを認識しているのか。

2. 口腔癌細胞の表層の変化は質的か量的か一般にどのようないわれているのか。

maskingの可能性はあるのか。

回 答 賀来亨(口腔病理)

1. H型物質はフコースを、A型物質はN-アセチル-ガラクトサミンを、B型物質はガラクトースの糖鎖の部分

を認識していると思われる。特異性はそれぞれが対応する赤血球凝集反応で行い、また、常にcontrolとして、血液型に一致しない抗体を用い、染色性は認められていない。

2. 量的な検索は行っていない。質的な判定である。量的な検索は抗体希釈により行っている報告もある。

maskingの可能性はわかりません。現在の説明としては、糖鎖不全説により説明されている。A, B, H血液型物質の場合はmaskingはないと思われる。

質 問 金子昌幸(歯科放射線)

H物質が前癌状態のときに残存すると述べられましたが、モノクローナル抗体に標識することにより、前癌段階の診断が可能になるとお考えでしょうか。

回 答 賀来 亨(口腔病理)

例えば、A型患者の場合、A型物質の局在が認められないで、H物質の局在が認められる場合、おそらく、A型物質への分化が止まり、H物質が蓄積していると考えられている。H物質の染色性パターンにより、前癌病変を客観的指標とすることができると思われます。